



釧路文学館の展示スペース。釧路文学に携わった人々の解説が詳しい。



文=伊藤哲也
写真=亀井川 英樹

秋 も深まった。まさに灯火親
しむべし。さっそく釧路駅
から歩いて八分ほどの釧路文学館
を訪れた。三十年の開館運動を経
て平成三十年に開館した、地元の人
々の熱意を感じる施設である。

釧路における文学活動の歴史が、
パネルや同人誌などで展示されて
いる。明治三十年代に地元で新聞
が発行され、文芸欄ができたこと
に始まり、石川啄木いしかわたくはくの釧路新聞入
社(明治四十一年)などが刺激とな
り、文学サークルが生まれたよう
うだ。大正時代末期になると、複
数の同人誌が誕生。釧路の文学熱



◎第二一回 釧路駅

『挽歌』の文学碑がある幣舞公園
(釧路市幣舞町1)から見た夕景。
こうした切ない風景が文学を育む
のだろうか。

囁んで泣き出した」という
文章に、愛する者の痛みを
感じる。
もう一人の釧路文学を代
表する作家が、桜木紫乃氏
(一九六五)。連作短編集
『ホテルローヤル』で直木賞
を受賞(平成二十五年)した。
その中の短編「シャッター



昭和33年1月「北海文学」同人会の様子。中央の女性が原
田康子。●釧路文学館／釧路市北大通10丁目2(釧路市中
央図書館6階) ☎0154・64・1740。9:30～19:30、月曜・毎月
最終金曜日・年末年始・展示入れ替え期間休館、入館無料。

は高まった。
戦後、新たに同人誌が続々と発
行されたが、その一つ『北海文学』に
連載された原田康子はらだやすこ(一九二八
二〇〇九)の『挽歌』が評判となった。
昭和三十一年に単行本となり、七十
万部が売れたというから、いかに
「大事件」だったかがわかる。いま
改めて読むと、たとえば「わたしは、
わたしの頬に触れている彼の指を

チャンス」に、こんな描写がある。
「貴史はベッドの上でよく膝の手術
痕をさわる。傷は山の尾根に向か
う道のように膝を半周しており、
美幸にはそれが自分と貴史を繋い
でいる道にみえる」。二人をつなぐ
道に痛みが影のようにつきまとう。
釧路文学は愛し合うかに見える
男女の孤独と悲しみ、痛みを描い
て美しい。そして、それはどうや





中秋の名月の翌晩、幣舞橋にかかった十六夜の月(写真中央の白い円)。

ら女性に分があるようだ。そんな感慨を抱きつつ、『挽歌』の碑がある幣舞公園から夜の街へと歩き、バー「ペロリサード」のドアを開けた。カウンター八席、テーブルが一つという静かな店は、物思いにふけるのにふさわしい。

「お薦めは？」

「ラム酒はいかがでしょう」

店主の加藤武史さんに従い、バルバドス産のラムをオンザロックでフルーティーな香りと洗練された甘みの、大人の酒だった。もちろん、それなりのアルコール度数がある

●Pelo Rizado(ペロ リサード)／釧路市栄町4-2 ☎0154・23・5657。20:00～翌2:00、日曜休(不定休あり)。チャージ1,000円、カクテル700円～、ラム酒800円～など。



バー「ペロ リサード」。ドアの丸窓が目印だ。



(左)一杯目のラム酒と肉、チーズ、フルーツの盛り合わせ(チャーム)。洗練された味わいのジントニックやハイボールも人気だ。(右)ずらりと並んだボトルに囲まれて、店主の加藤さん(左)とラム酒談義。常時ラムは40種類、ジンが15種類ほどそろ。

ので酔いが深くなるのも、どこか釧路文学に似ていると思う。もう一杯、ラオス産の「ラオデイ」というラム(これも素晴らしい)を今度はストレートで味わい、陶然となってホテルへ帰った。

翌 朝早く、車で阿寒湖畔へ向かった。ガイドの内木亨さんとともに、「ボッケの森ガイドウォーク」へ出発する。

「ボッケはアイヌ語で煮え立つ。熱水が泥となって湧き出している場所です」と内木さん。

ホテル街から五分ほど歩き、湖畔の遊歩道に入った。一般財団法人「前田一歩園財団」の所有地で、一般の人々も入れるエリアである。エゾマツ、トドマツなどの針葉樹とカツラ、ハンノキなどの広葉樹が混じる針広混交樹林だ。

「林床が明るいですね」と言うのと、「倒れた木をそのままにしている倒木更新の森だからです」と内木さん。クマザサ



(上)遊歩道のスタート地点で出合ったサラシナショウマの群落。秋の光景である。(左)樹木の凍裂を解説する内木さん(右)。ガイド歴20年以上で、特に植物に詳しい。

よりもシダ類が目立つ場所が多く、穏やかで居心地のいい森である。倒木はキノコなどの栄養となり、

●鶴雅アドベンチャーベースSIRI(シリ)／釧路市阿寒町阿寒湖温泉4-6-10 鶴雅ウイングス1階 ☎0154・65・6276。ボッケの森ガイドウォーク5,500円(12月まで、2名以上の1人料金)、積雪期はスノーシューで歩くツアー(12,100円)など。



大きなオヒョウの倒木。幻想的なシーンだった。

ゆっくりと分解されて土にかえる。自然の循環に任せることで、自然環境の保全と適正な利用を図るという前田一歩園の方針である。

白い尾のようなサラシナショウマ、ツリバナの鮮やかな朱色の実、黒い実をつけたエゾウコギ。ほかにツルアジサイ、ヤマブドウ、ナナカマドなど植物種が実に豊富だ。



大地のエネルギーが湧き出しているボッケ。



ツリバナの実。真紅の殻(飯の種子皮)が割れ、朱色の実が顔を出している。

ニガクリタケと思われるキノコ。このように菌類が倒木を分解し、土に戻していく。



阿寒湖の向こうにそびえる雄阿寒岳。

「冬」

にトドマツの樹皮が凍って起きます。夏になると、その裂け目にアリの入ってきます。すると、それを食べるキツツキが来るのです」と内木さん。その裂け目からフイトンチッドという物質が放散され、森林浴セラピーにもなる。植物と動物の織り成す営みの中で、私たち人間も癒されるのだらう。

ボッケはボコリボコリと大地の底から湧いてくる、エネルギーの塊だった。この周辺は地熱が高いため、冬も雪が積もることがなく、

コオロギの繁殖地になっている。秋風の中でコロコロ、コロコロという虫の音を聞いていると、私たち人間もまた大いなる循環の中のささやかな一部に過ぎないと思ったものだった。

◎「阿寒湖畔エコミュージアムセンター」

阿寒湖畔の動植物、アイヌ文化、マリモやヒメマスなどが展示され、この地域の自然の全体像がつかめる。自然の魅力を紹介する動画やボッケ遊歩道のマップ展示、前田一歩園財団についてのパネル展示、飲食可能なサロンスペース等がある。

●釧路市阿寒町阿寒湖温泉1-1-1 ☎0154-67-4100。9:00~17:00、火曜(祝祭日の場合は翌日)・年末年始休館、入館無料。



広々としたスペースでゆったりと展示が見られる。